

～織田信長サミット2009に向けて～



小牧山

戦国に馳せる

清須市文化財保護審議会委員

加藤富久

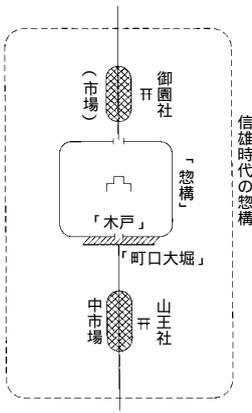
第6回 尾張の平定

清須城下と信長

信長時代の清須城下は、金箔瓦をのせた石垣上の天守閣を中心に、市・町全体を三重の堀で惣構えした織田信雄以降の清須、ましてや、平成元年竣工の望楼型模擬天守のある今の清洲城とも違っていました。

『信長公記』などによれば、五条川沿いの土塁に建つ方形居館(南北櫓)程度の城の周りに、700～800人の侍衆とそれに属した町人が甕を並べ、町口大堀で守られており、その外側に川湊や中市場、御園市が広がる構造でした。そして各地への道が通じていました。

これは、守護所時代の既成都市に近いとはいえ、日本都市形成上重要な要素たる城下町の原形が、信長や家臣達が昔んだ町にあるとすれば、信長期の清須では、兵農分離した侍の集住が始まり、鍛冶職人や商人の誘致、馬市の設置、道路整備などの振興策もとられ、黒木書院や猿面茶席の如き古式建物もあつたと思われれます。



信長時代の清須(模式図)
(中部よし子氏作図による)

さて、子無き正室濃姫がこの清須城に入ったかは定かではありませんが、弘治3年(1557年)小折(江南市)の土豪生駒家宗の娘吉乃(生駒の方)との間には長男信忠が生まれ、信長は大狂喜しました。その後も次男信雄・長女徳姫が生まれ、別に三男信孝も得て、しばし平穏な時もあったようです。

日々の武術鍛錬。清須の松井友閑に習った幸若舞『敦盛』の一節「人間50年、下天の内を比べれば、夢幻の如くなり、一度生を得て滅せぬもののあるべきか」と、小唄のみを愛した信長。山王社の火起請や比良の蛇池への立会。それらからは彼の優れた体力・厳しい死生観・合理精神がうかがえます。また、津島の祭りや盆踊りへの参加、尾北の生駒氏・熱田の加藤氏らとの結びつきは、経済面のみならず、重要な情報源でもあつたのです。

岩倉攻めと上洛

こうした信長の抬頭に対し、永禄元年(1558年)、父信安を追放した岩倉城主織田信賢が、美濃の斎藤義龍と謀り攻めてきました。犬山城主織田信清と結んだ信長は、これを浮野(一宮市)に迎え撃ち、長槍・

鉄砲を使って首1250と岩倉方に半数の死者を出す打撃を与えました。このときに手柄のあつた前田利家が、秀吉の媒酌でまつと結ばれています。

翌年正月、岩倉に軍を進めた信長は、城下を焼払い、裸とした岩倉城を包囲しました。その最中、秘かに上洛した信長は尾張支配の承認を求め將軍足利義輝に謁見。その足で伴80人と京都、奈良、堺を巡り、鉄砲製造や茶の湯や天下に目を開かせ、八風越で無事清須に戻っています。

帰国早々の3月、最後の戦いで、尾張上四郡の守護代家伊勢守系織田信賢を追放した信長は、遂に尾張を統一し、岩倉城を破却しました。このとき、刈安賀、小牧、清須に移った寺院や町家もあり、また岩倉織田家老の子山内一豊の苦難の出発ともなりました。



岩倉城跡

問合先 文化振興課 ☎76 11 89

訂正 広報8月15日号に掲載しました「戦国に馳せる」の執筆者は、加藤富久氏(清須市文化財保護審議会委員)の誤りでした。お詫びして訂正いたします。